

エクステンジリングス

甘木数彦

第一章

四

真っ暗な中でシャワーの温もりが全身を滑り落ちながら、内側に暖かさを分け与えてくれる。目の前の壁が粒子の粗い緑の濃淡として見えている。ピートは目を閉じると頭に湯を浴びせた。髪の毛のあいだに指をつっこんで頭皮を搔くと、その周囲がますます痒くなった。シャンプーを手に出すと、熱心に頭を洗った。

動かなくなった少女を背負ってネヴァーランドを出てから、もう何日になるだろうか。少女を使われていない飲食店へ置き去りにして、もう何日になるだろうか。今ではどちらとも遠い過去のように思われた。

外の世界での暮らしは、ピートに絶えることのない緊張を強いていた。自分には街中のあらゆる監視網もセキュリティも無効なのは判っていたが、それでも人間に見られればごまかせない。それを避けるすべは教えられていたが、決して楽なことではなかった。

ピートが居るのは営業終了後のスポーツジムだった。警備が自動化されているおかげで、誰かに見つかる心配もなくシャワーを浴びることができる。カメラはたとえピートを捉えても、その姿を撮影しない。ただ、さすがに明るくなれば周囲は記録されてしまうので、電気は点けられなかった。それでも暗視のできるピートは、色がなく若干不鮮明に見える点さえ我慢すれば、不自由なく行動できた。

シャンプーを流しても、ピートはそのまま湯流に頭を打たせ続けていた。そうして、これまで繰り返し思い出してきた出来事をまた思い出す。

ピートは記憶にある限りの以前から、ネヴァーランドでティンクと暮らしてきた。本当の名前はピーターパンと言ったが、ティンカーベルが親しみを込めて呼んでくれるピートという名前の方が気に入っていた。ピートもティンカーベルのことはティンクと呼んでいた。

ティンクはピートの唯一の親友であり、教育係でもあり、いたずら仲間だった。ピートが起きているときはいつも一緒に、二人は喋ったりふざけ合ったりしていた。

ネヴァーランドにはもう一人、ナナという世話係が居た。ナナはネヴァーランドにいるただ一人の大人で滅多に姿を見せなかったが、外の世界でピートのために生活用品を買ってきたり、病気の時はどこからか薬を持ってきてくれたりしていた。

最初のうち、ピートは外の世界へ出るときに気を付けるべきことや、人に見付からずに動き回る方法、子供を上手にネヴァーランドへ連れてくる方法、楽しく遊ぶ方法などを習って暮らしていた。市内の地図を覚えるために、ティンクと「それはどこ？」遊びもした。市内の白地図を前に交互に場所の名前を出し合い、正しい場所を示せるか競い合うのだ。おかげでピートは全ての通りや建物を覚えることができた。

しばらくすると時々ピートは外へ出て、子供を連れてくるようになった。子供をネヴァーランドへ連れてきて、楽しく遊ぶことがピートの仕事なのだ。もちろん朝が来るよりも前に子供は家まで送り届けることになっていた。そして、一度遊んだ子供は二度と連れて

きてはいけない。こうしたことも全てティンクが教えてくれた。誰と遊べばいいかも、毎回ティンクが決めていた。

ピートはティンクとふざけたり、子供と遊んだりする毎日を心から楽しんでた。連れてきた子供から外でどんな暮らしをしているのか聞くこともあったが、楽しくないことも多いというのがピートにはなかなか信じられなかった。ただ、どうやらそれは大人たちのせいらしかった。以前ネヴァーランドに居たというフック船長という大人も、ろくな人間ではなかったらしい。

ピートは一度、なぜ自分が外の子供と一緒に暮らしていないのかティンクに尋ねてみたことがある。そのときティンクはソバカスの浮いた頬を持ち上げるようにして笑うと、ピートは妖精の女王の子供であり、特別なのだと答えた。いつもは面白いことばかり言うのに、ピートが真面目に質問をするとちゃんと答えてくれる。ピートはティンクのそんなところも大好きだった。

幸福な毎日は突然おかしくなった。ある日ピートが目を覚ますと、見慣れた小さな姿がどこにもないのだ。それっきり今になるまで、ティンクの居場所は判らない。

最初の数日、ピートはネヴァーランド中でティンクを探し回った。疲れ果てるとその場にうずくまり、そこで眠った。その頃からピートは頭痛に悩まされるようになった。

そのうち次の子供を連れてくる日になった。毎回どの子を連れてくるかは事前に決まっていた、行き帰りの経路ももう決まっていた。ピートは悩んだ末に、予定どおり子供と遊ぶことにした。

ただでさえ疲れ切り混乱していた上に、ティンク抜きで外へ出るのは初めてだったせいで、ピートは苛立っていた。それにティンクはいつも、「曲がろうとしている角の向こうに人がいる」といったようなことを事前に教えてくれたていた。そうした案内がないのもピートにとっては不安だった。実際、目指す子供の家へ着くまでにピートは何度か大人と会ってしまいそうになった。

どうにか子供とネヴァーランドへ戻ったものの、ピートはどうしても連れてきた女の子と遊ぶ気にはなれなかった。女の子がどことなくティンクと似ていたせいもある。ティンクと同じ、金色の髪と青い目を持っていたからだ。

おまけに子供と遊ぶときは歓迎の印として「妖精のジュース」を飲ませなければいけないことも、すっかり忘れていた。そのジュースはどんなときでも飲んだ人を幸せな気分にするのだ。それにジュースを飲まない、人間にはティンクのように小さな妖精の姿が見えない。

二人は岸につないだ小舟に乗っていた。始め、少女は元気のないピートを心配してあれこれ話しかけていた。だがピートが不機嫌な態度になるばかりだったので、やがて家に帰りたいたいと言い出した。もう一度外へ出る。ピートにとっては気の進まない話だった。いっそのこと、ネヴァーランドの前から少女一人で帰らせようかと思ったくらいだった。

一向に腰を上げようとしないピートを少女はののしった。

「ねえ。早くおうちに帰らしてよ」

少女はピートの着ているジャージの袖を引っ張った。

「うるさいな。解ってるから、ちょっと待ってなくてもいいだろ」

少女は叩き付けるようにしてジャージから手を離すと、ピートの背中を押した。

「かっえっろー、よっ」

ピートは背中を丸めて座ったまま、何も言わない。

「だいたいさあ、兄さんが本当のピーターパンなわけないじゃん。ティンカーベルもいないって言うしさー」

少女の言葉にピートは思わず振り返った。

「なんでだよ？ どうしてそんなこと言うんだよ」

「だってさ、わたし本で読んだよ。本物のピーターパンはジャージなんか着てないし、わたしみたいな髪の色だし、空だって飛べるしねー。それに、本物は兄さんと違って、もっとわたしと同じくらいの歳のはずだよ。ピーターパンはずっと子供のままだって書いてあったもん」

「僕は子供だよ。背は高いけどさ」

そう言うとピートは笑おうとしたが、口元がこわばって上手くいかなかった。

「えー。兄さんぜったいに中学か高校くらいだよ。なんでピーターパンのフリしてるの？」

「フリじゃないよ。本物だって言ってるじゃないか！」

「だったらティンカーベルに会わせてよ」

「ティンクは今いないんだ！」

「ほらウソだ。ティンカーベルなんていないんだ」

少女は勝ち誇って宣言する。それはピートにとって最も恐ろしく、忌むべき呪いの言葉だった。少女はなおも言いつのろうと、口を開きかけた。

これ以上なにも言わせてはいけない。どんな呪いも。ピートが考えていたのはそれだけのことだった。そして気が付けば、船底にあった目の粗いロープで少女の首を絞めていた。見る間に顔が紅潮し、目が見開かれる。口からよだれと共に、聞き苦しい音が漏れてきた。汗ばんだ額に張り付いた前髪が、目元を隠している。

やがて、少女の体から力が抜け、動かなくなった。ピートは慎重に手を離してみた。少女の上体がゆっくりと後ろへ倒れる。後頭部が船底にぶつかり、小舟がかしいだ。もやい綱がわざとらしく軋んで音を立てる。

ピートはそこでやっと我に返った。目の前で死んでいる少女。両手に痛みがあった。見れば、苦し紛れに少女の立てた爪跡から、皮膚が裂けて血が滲んでいる。途端に、ピートは酷い息苦しさを感じた。浅く、早く、呼吸を繰り返す。頭痛がした。

逃げよう。そう思ったピートは乱暴に立ち上がり、あやうく小舟ごとひっくり返りそうになった。とっさに中腰の姿勢で揺れが収まるのを待つ。視界の端で死体の頭が揺れていた。ピートは慎重に岸へ降りるとその場にしゃがみ、少女の体を持ち上げて抱き寄せた。

抵抗感のない死体は、遊び疲れて眠った子供と何も変わらなかった。ピートは死体を背負うと、ゆっくりと歩き出した。これまでピートは何人もの子供を、そうやって家まで送ってきた。寝ている子供をそっとベッドに横たえ、布団を掛けてやるとき、ピートは手応えのある満足感を味わったものだった。

しかし、今背負っているものは二度と寝息も立てないし目覚めもしない。おまけに失禁しているのか、背中を生暖かい湿り気が浸食してくる。今すぐこの場へ捨ててしまいたい。だが、それはできなかった。以前ティンクから言われたルールのの一つを思い出したのだ。決して子供に危害を加えてはいけない。もし破ればネヴァーランドには居られなくなる。

場合によっては命を失うことだってある。そのことをピートへ教えたとき、珍しくティンクが厳しく真面目な態度だったことを憶えている。もしティンクが戻ってきたとき、ネヴァーランド内に死体があれば自分のしたことがバレてしまう。だからどこかへ捨ててくる必要があった。

頭痛は酷くなる一方だった。相変わらず落ち着かない呼吸を宥めようと努力するが上手くいかない。ピートは自分が泣いていることに気付いた。がくり、と死体の頭が後ろへのけぞった。それでも一歩ずつ、ピートは歩き続けた。

死体を捨てたらすぐにでも帰るつもりだった。だが、まずどこへ捨てるのかを決めるのに数日かかった。適当な場所を考えようとしても、うまく集中できなかったのだ。いつの間にか放心状態になって、何時間も少女の死体を眺めていたこともある。それでも、捨てればネヴァーランドへ戻るつもりだった。ところが、やっと決めた場所へ死体を横たえてきた帰り道、ピートは見てしまったのだ。

そのときピートは周囲を警戒しながらも、数日ぶりの開放感に包まれていた。ティンクが消えて以来、初めて味わった明るい気分だ。着替えたかった。風呂にも入りたかった。暖かい食事も取りたかった。裏通りに行く忍び足も、徐々に軽さを取り戻していた。どこからか子供の、幸せそうな笑い声が聞こえる。ピートは視線を上げた。と、通りの先の天井すれすれを横切る姿があった。ピートは一瞬だけ硬直し、足音がするのにもかまわず駆けだした。見えたのは一瞬だけのことだったが、ピートはそれがティンクであることを確信していた。急いで角を曲がる。表通りを挟んだ向かいの路地に入っていくティンクの後ろ姿が見えた。ピートは人がいないことを確認するのもしどかしく通りを渡ると、路地へと飛び込んだ。

それから数時間、ピートはティンクの姿を求めて街中を走り回った。しかしそれきり、ティンクには出会えなかった。ピートが疲弊した体全体を引きずるようにして隠れ家へ帰り着いたとき、表通りからは既に朝の始まりを告げるざわめきが微かに聞こえ始めていた。

それ以来ピートは外の世界に留まり、ティンクを探し続けていた。構成要素が極端に少ない世界で生きてきたピートにとって、ティンクの存在はあまりにも大きかったのだ。ピートは寝静まった都市の間隙を足を忍ばせて歩き回り、必要なときは都市が有料で提供する様々なものをかすめ取って暮らした。

そして今日、ピートは再びティンクの姿を見かけた。そのときピートは替えの下着を手に入れるため、衣類の量販店へ行くところだった。たった数日のことではあったが、ピートは常に周囲を警戒することに慣れはじめていた。通りに人影がないか確かめることも、ごく自然な動作になっていた。足音を忍ばせる独特な歩き方に筋肉が強張ることもない。

周囲は上や下の階と中でつながっている建物が多く、そのせいでドアがほとんどない。窓ガラスはどれもマジックミラーになっており、それはピートが歩いている裏通りでさえ同じだ。そのため、内側のカーテンは閉ざされているはずだが、それを確認できない以上油断はできなかった。

ピートは窓を透かしてぼんやりと目に映る熱源をチェックしながら、静かな道を歩いていた。右にも左にも、すぐそこまで建物が迫っている。おまけに、家の中へ収まりきらな

い古びた冷蔵庫や発育過多の観葉植物などが遠慮なく並べられているせいで、道幅は実際以上に狭くなっていた。ビニール袋へねじ込まれた古着の束をピートは慎重に跨ぎ越える。窓とガラクタの並びが途切れると深く息を吐き、ピートは正面に意識を集中するために前を向いた。

そこに、ティンクがいた。やや離れたところからピートを見ている。口元には見慣れた悪戯っぽい笑み。ピートはそこにいるのが本当にティンクなのか、よく似た別人なのか、判断できないでいるかのように立ち尽くしていた。宙に浮かんだ小さな少女は小さく首を傾げると、やや上目遣いになった。それから誘うように、背中中の羽をゆるやかに震わせる。今にも何か言いそうだ。変に緊張してしまい、ピートは軽い頭痛を覚える。

不意にティンクは身を翻すと、一度だけピートに視線を寄越してから少し離れた窓まで飛び、ちょうど立て掛けられた折りたたみ式のフィットネスマシーンが造る影の辺りで見えなくなった。ピートがそこまで走り寄ると、そこにもうティンクの姿はなかった。周囲を見回しても動くものはない。頭痛が酷くなり、混乱が一気に押し寄せる。なぜ自分に気付いているのに、ティンクは行ってしまったのか。どこへ行ってしまったのか。そもそもネヴァーランドからなぜ離れてなぜ今までなぜ今になって。

止めようもないほど激しく眼球が動き回る。ピートはきつく目を閉じると、両手を壁につけて目眩が治まるのを待った。壁に当てた手の平が熱い。しばらく経ってから目を開けてみると、壁に汗が薄く跡を残していた。

ピートは必死でティンクが消えたときのことを思い出してみた。もう細部が曖昧さに侵されだしている。ティンクが背を向け、絶望的に遠ざかる。小さな背中中の両端ではばたく半透明の翼。窓近くの暗がりに消える。ピートは目の前の窓を眺めた。違和感がある。もう一度記憶を探る。ティンクの向こうに見えている記憶の中の窓に目をこらす。細くて黒いスリットのような隙間だ。確かにあのとき、窓は細く開いていたのではないだろうか。ティンクはそこから室内へ入っていったのだ。だが、どうしてだろう。

なおも考えていると、記憶に引っかかるものがあった。窓からやや距離を取って立つ。引っかかっていたものが流れ出す。一年ほど前、ピートはその家の子供とネヴァーランドで過ごしたことがあったのだ。

そこから先を推測するのは簡単だった。子供がどうにかしてティンクを誘い出し、この家に留まらせているに違いない。もちろん、ティンクを独り占めするためだ。惑乱がまだ抜けきっていないピートに、その着想が事実かどうか検討する余裕はなかった。衝動的に窓の合わせ目へ指先を当て、うっすらと冷たい金属の表面を何度か軽くなぞる。それだけで、窓に取り付けられた全ての鍵が開いた。

窓から室内へ入ると、子供はベッドで眠っていた。小太りの男の子だ。ピートは周囲を見回す。壁に貼られた世界地図、ベッドの奥にあるカラフルな色遣いの木棚。床には遊んだままのおもちゃが散らばっている。周囲を見回しても、ティンクはいない。少し迷ってから、ピートは子供の体を優しく揺すった。

「んー？」

目覚めた子供に向かって、ピートは静かに微笑んでみせる。怯えさせないための鉄則だ。

「僕を憶えてるかい？」

精一杯、優しく問いかける。

「ピーターパン！」

ピートは自分の唇に人差し指を当てて静かにするよう示すと、ゆっくりうなずいた。

「夢じゃなかったんだ」

男の子は寝起きで頬を赤くしたまま、まだどこかぼんやりとした顔を興奮させる。

「もちろん。僕は夢なんかじゃないよ。今日は君に聞きたいことがあって来たんだ。実はティンカーベルが迷子になっちゃってね。ひょっとしたら、何か知らないかい？」

「ううん。知らない」

平然とした態度に、ピートは怒りを破裂させそうになった。言い訳をするならまだしも、知らないフリをすれば納得するとも思っているのだろうか。ピートは男の子に、馬鹿にされているとしか思えなかった。

「ティンカーベルがこの部屋に入っていくのを見たんだけど？」

「え？ ホントに？ どこどこ？」

子供は少しはしゃいだ声で辺りを眺め回す。その少し楽しげな態度が余計に憎らしい。

「いいかげんにしろ」

押し殺した声に、最大限の怒りを染み出させる。

「どうしたの？」

子供は初めて、何かがおかしいことに気付く。ピートは無言で、子供との間合いを詰めた。子供は距離を取ろうとするが、奥にある木棚に阻まれてしまった。

「僕が、どれだけ、探し回ったか」

「泣いてる、の……？」

「だから、返して、くれよ」

「そんなの、知ら」

子供は最後まで言うことができなかった。

気が付けば、ピートの手の中で細い首が無惨にへこんでいた。気道を押し潰されたのだ。驚いて手を離すと、子供の後頭部が木棚にぶつかり、中の物がぶつかり合って音を立てる。息が荒くなっている。再び頭痛が頭を破り割ろうとする。ピートは自分の手を、次に子供の顔を見た。自分がやったはずなのに、首を絞めている間のことがもう思い出せない。そもそも、どうして死んでいるのか。刷り込まれた習性が、逃げるように訴えている。ピートは死体を背負うと、その場から立ち去った。

結局、男の子の死体は途中の空き店舗に置いてきた。見付けられやすい気はしたが、隠れ家まで背負って帰る気分にはどうしてもなれなかったのだ。それに今になっても自分が殺したようには感じられなかったし、殺した理由も判らない。確かに怒りを感じてはいたが、そんなことをするほどではなかったはずだ。

何もかもが上手くいかない。それどころか、どんどん酷くなる。だいたいどうしてティンクは出てこなかったのか。どうして自分に気付いていたのに、背中を向けて去っていったのか。なにもかも、ティンクが企んだことなのか。そうは思えなかった。以前、ティンクと交わした遣り取りが蘇る。

それは子供をネヴァーランドへ連れてくるようになって間もない頃のことだった。一日の終わり、ピートはネヴァーランドの夜空を眺めながら、気持ちのいい草の上に足を投げ

出して座っていた。横ではティンクが空中に寝そべり、頬杖を突いていた。

それまで何の話をしていたのかは忘れてしまった。ただ、自分が大きな満足感に包まれていたことは憶えている。

「ねえ。外の世界でもしティンクとはぐれちゃったら、どうしたらいいの？」

ピートの何気ない質問に、ティンクは小さな口を大きく曲げて笑った。

「どうしたの？ そんな臆病、ピートらしくないよ。この前だって、あんなに上手くやったじゃない」

「違うよ。ただ、その。もし、もしもだよ。そうなったときにどうするか決めておかなきゃ困るだろ」

ティンクはゆったりと二本の足を上げ下げした。呼吸に合わせて羽根が閉じたり開いたりしている。

「そうねえ。そんなこと絶対にないと思うけど……」

「どうして」

ティンクは右腕を伸ばすとその上に頭を乗せ、目を細めた。

「私はそんなに鈍くさくないし、ピートのことをいつも見てるから。でももし、そんなことになったら、絶対に戻ってくる。この羽根に賭けて誓ってもいい。だからピートは安心して自分のやることを果たして。私は必ず戻ってくるから」

そう言ったときのティンクの、まっすぐな声とまっすぐな瞳、それに自信たっぷりの笑みをピートは今でもはっきりと思い浮かべることができた。

やっぱり、ティンクには何か事情があるんだ。だから、僕は自分のやるべきことをする。ティンクを助け出して、一緒にネヴァーランドへ帰るんだ。

シャワーを止める。静けさが廊下から忍び込んできた。ピートは大きく一つ息を吐くと、確固とした足取りでシャワールームを後にした。体からしたたり落ちた湯が点々と跡を残していたが、それもすぐに消えてしまった。